『分身』の叙述と対位法 (一)

佐　野　健　治

ゴリャートキン氏は招かれない上官の娘の誕生祝賀会に乱入したうえ奇行を重ね，結局つまみ出される，その寸前，薄笑いをもらしながらつぶやく「……しかしまあ，こんなふうになってしまったからには，彼としても，皆さんに同意してもよろしいのですよ ...no chto esli tak delo poshlo, to on, pozhaluj, gotov soglasit'sja.」(第4章末尾) ここで彼が自分のことを「彼 on」と呼んだのは（翻訳はふつう私となっている），彼の意識がもう一人の（新）ゴリャートキン氏（分身）の出現を予感していて，それが思わず口をついて出たものだろう。同様の分身の出現の予感は，これより前，主人公が課長アンドレイ・フィリッポヴィッチと馬車ですれ違うとき，自分はまったく自分ではないのだ，「驚くほどおれによく似た誰かほかの男」なのだ(第1章）と心の中で叫んだことに，またクレスチャン・イワーノヴィッチ医師のところで「私のごく親しい友人」(第2章）について話すというところにもすでに見られる。「やつら」は人間一人を，すなわち「私のごく親しい友人」を精神的に殺すためにデマをとばしているのだと。

『分身*』というパロディは，ゴリャートキン氏に，初めはちらッと予感がする前触れがあり，ついで深夜通行人の人影が彼に接近してき，その後自室に現れた分身と応対し，役所で仕事をめぐる新ゴリャートキン氏の独走ぶりに翻弄され，ついには主人公は精神病院へ馬車で運び去られるという筋書きである。運び去られるゴリャートキン氏を分身が見送り，それを本人は予感していたというのが，おちである。

分身はゴリャートキン氏の幻覚，幻視，幻想である。主人公には分身が存

在するという予感 predchuvstvie がする〔予感のほかに期待 ozhidanie も出てくるが，いずれもここでは，予想を越えた，あるいは予想以前のひらめき，ゆらぎを指す〕。「予感」という，未来の時間帯に属する出来事についての人間の感覚を示すことばが作品のキイワードとして繰り返され，これが彼を誘導する。主人公の過去に属することがらはほとんど言及されない。分身である新ゴリャートキン氏は，作品の中に出現した後は，出てくるたびに主人公ゴリャートキン氏への態度を変える。ゴリャートキン氏もまたそれに応じて新ゴリャートキン氏への態度をつぎつぎと変えていく（ただし，それは一定の枠内にとどまり，分身のそれとは対照的である）。これらのすべては突然決まるのであり，文中の「突然」は，もう一つのキイワードである。そればかりか，作者と語り手がこの主人公の行為と思考の変化に対する対応をつぎつぎと変えていく。その上さらに読者がこれらの意識の運動になんらかの方法と程度で加わり，自ら一つの作品世界を形成していく。

この稿は㈠において，作者，語り手，そして読者のそれぞれが，主人公と分身の相互関係をいかにイメージ化し，両者の関係を考え，小説的空間を成立させていくかについて，主として第5，6章に触れて述べる。㈡では主人公の意識の運動を表すことばを対位法のかたちで生み出し，これを通じて，人間の精神世界の現代的構成のうしろにあるはずの，いわばブラックマターに相当するものにまで想像力を及ぼそうとした，ドストエフスキーの初期作品の創意を読みたい。

ゴリャートキン氏は実際にはベレンジェイェフ邸を閉め出され中庭へ放り出されたのだが，語り手は，逃れたと書いている。彼が逃れた対象は，敵ども，追跡，爪弾きの雹（ひょう），びっくり仰天した老女らの悲鳴，女達のため息まじりの叫び，そして課長アンドレイ・フィリッポヴィッチの殺人者的な視線，これらから彼は逃れたのである。彼がフォンタンカ運河の河岸めざして無我夢中で駆け出したとき，時計台は夜中の12時を報じた。ここで語り手は言

う――ゴリャートキン氏は殺された bjl ubit――ことばの完全な意味において殺された，と。

約10年後に書かれた『罪と罰』のラスコーリニコフは犯行後，おれは自分を殺してしまったとつぶやいたが，彼には生活の再建の可能性があった。ゴリャートキン氏も同様に自我の境内で自問自答を際限なく繰り返す人間である。しかし社会的な生活面でことさら異議申し立てをすることなく，ゴーゴリの『狂人日記』の主人公に似た生活の終わりを迎えた。こうして『分身』は『狂人日記』のテーマを踏襲するように見えてもそれは枠組みをであり，ドストエフスキーが踏み込んだところは当時前人未踏のシンボリズムの文学である。

ゴリャートキン氏の状況と立場を象徴するのはつぎの環境描写である。「湿っぽい，霧の深い雨まじり雪まじりの，炎症，鼻風邪，瘧（おこり），扁桃腺炎，ありとあらんかぎりの種類の熱病，一口に言えばペテルブルグの十一月のありとあらゆる贈り物を残らずはらんでいるすさまじい夜であった。風は人通りの絶えた街々に唸り声をあげ，フォンタンカのくろぐろとした水を舫（もや）い用の鉄環よりも高く持ち上げ，河岸の痩せひょろけた街灯を意地悪く揺さぶっていた。すると街灯はまた街灯でかぼそい身を切るような軋（きし）み声をあげてこれに応じる。そしてそれらのものが一緒になってペテルブルグのすべての住民にきわめて馴染みの深い，ぴいぴいがちゃがちゃという，果てしのない協奏曲をかなでるのであった。」これは自然主義リアリズムの描写などではない。

日暮れとともに幻想的な風景を演出する人工都市ペテルブルグであるが，いま作者が描いてみせる冬の深更の情景は，現在のゴリャートキン氏のちぎれそうになった心身の状態の表出である。それだから語り手の言葉は，リアルな描写と言うにはあまりにも矛盾が多い。雨と雪が同時に降っていて，風に吹き裂かれた雨脚が，消防ポンプのホースからでもほとばしり出るように，ほとんど横なぐりに襲いかかる，と言ったかと思うと，静寂を破るもの

と言えばただ遠くに聞こえる馬車の轍(わだち)の音と風と街灯の軋(きし)む音しかない夜の沈黙の中に……といった調子で，狂騒的なこころの状態とその奥の奥にある静まり沈澱したものとの対比が，この都市描写にはある。ドストエフスキーの作品に自然描写はほとんどないし，わずかにあっても単なる自然描写はない。ここに描出された状況はゴリャートキン氏の精神的なコンツェルトと言ってもいいが，むしろ，それは人工的な都市ペテルブルグの構築の中に押し込められた，人間の意識たちのせめぎあいを，言葉化しようとした，現代（近代）文学のはしりである（1847年）。

「雨，雨，それに，ペテルブルグの十一月の寒空の下に吹雪と濃霧が猛威をふるうころ現れ出る，なんと名づけてよいかも分からないありとあらゆるものが，それでなくても不幸のあれこれによって殺されたゴリャートキン氏を，突然攻撃した。」

作者は『分身』に「ペテルブルグ詩 Peterburgskaja poema」という副題をつけた。幻想的な風景を自ずから演出する人工都市ペテルブルグというイメージとは別に（それも含む），この「なんと名づけてよいかも分からないありとあらゆるもの」を内に抱え込んだ人間たちの意識の集合を捉えようとすることが，この詩の意図である。そこではこころの矛盾が強調される。それはペテルブルグに住む人間たちの，いわく言いがたい人間的矛盾と屈折，意識の二律背反，いわば人間宇宙を構成するブラックマター（見えない）のようなものを，ひとまとめに摑み出そうとした詩だろう。

こうして小説は，得体の知れないコンツェルトの演奏を加えて，なにか出そうな場の環境づくりができた。遠くから，水位を知らせる大砲の音がなにかの到来を予告する。

なにか，なんだか分からないものがゴリャートキン氏の上に一度にどっと襲いかかってきた。少しの情け容赦もなく息つぐ暇も与えず，それは骨の髄にまで沁み込み，わずかに残っていた意識をすら朦朧とさせた。これが分身を出現させるためにゴリャートキン氏に与えられた状況と場である。そこ

へ，突然，どこから湧いたか，分身が現れる。それも一挙にではない。じわじわと，現れそうになったかと思うと消えるということを繰り返したあげく，気がついたときはそこにいたのである。

語り手は言う，もし「局外の，利害関係をもたない，なんらかの観察者（第三者的な傍観者）」が，ふと何気なくゴリャートキン氏の歩き方を見たとしたなら，彼の目つきは「われとわが身から逃れてどこかに身を隠したい，どこでもいい，われとわが身から逃れさえすればと願う人のようだと，言ったに相違ない！」このように書き手の立場について注記していることから見て，作者は語り手の複数の視点を，意識的に使い分けているのである。実際，複数の視点の転換と奇術師的な間のとりかたとを組み合わせることによって，分身の出現と奔放な活躍はリアルなことのように読者に思われるのである。

分身出現について，出現に至るまでの叙述をすこし具体的に追ってみよう。

最初ゴリャートキン氏が，誰かがそこにいて，早口に話しかけてきたような気がしたとき，語り手は客観的に氏の動きを伝え，氏がこれについて「空耳だったのかな？」と言ったこと，降りしきる雪のかなたを凝視して，なに一つ新しいものはゴリャートキン氏の目に映らなかったことを述べる。この項はいわゆる第三者的な観察である。

通行人が目に入ったとき，ゴリャートキン氏はこれをおそらく彼と同じように，なにか事件があって遅くなった人にちがいないと考える。しかし続いて「ことによると，あいつもご多分にもれず，いや，あいつこそ最も肝心な問題 samoe glavnoe delo かも知れないぞ」と思う。ここまではゴリャートキン氏の内からの叙述（一人称の発想を三人称の形式で述べた）である。続いて，語り手は主人公を外からの観察に戻って述べる，「だが，ゴリャートキン氏はそんなことを別にはっきりと考えたわけではなく，ただ瞬間的に

なにかこれに類した不愉快なことを感じただけであったかも知れない」と。そこへたたみ込むようにして「第一，考えるにせよ感じるにせよ，そんな余裕はさらになかった。通行人は早くも二歩の距離に迫っていた」と断定的に，架空の事実を押しつける。こうして有無を言わさぬかたちで分身は主人公の目前に出現する。もし第三者的な観察者なるものがいて，主人公の内奥を外から叙述したならば，「通行人は早くも二歩の距離に迫っていた，とゴリャートキン氏の目には映った」と限定せざるをえないところである。

この項では，語り手は主人公の内と外からの発話を緩急自在に取りまぜて叙述し，加えて語り手自身の視点から分身の出現を断定するような文が現れて読者を誘導する。

すれちがった通行人を目で捉えるためにゴリャートキン氏は「風が彼の風見の羽をくるりと一回転させるような早業で」振り返って見たが，通行人は吹雪の中に姿を消していた。「おれも実際気でも狂ったのだろうか？」と彼は考える。このくだり再び語り手はいわゆる第三者的な観察者に戻っている。だがまたもや人の足音が聞こえてき，読者は寄せては返す波のようなリズムに捉えられていく。

今度の通行人は，十分ばかり前にすれちがった，彼に見覚えのある通行人その人だったという，読者にとってもすでに馴染みになった対象として登場する。ゴリャートキン氏はこの通行人の後を追って自分から接近し，人違いをしたことを相手に詫びる。ここまで一連の通行人劇（実際は一人芝居）を見てきて，読者は，語り手が主人公の内面を描くことはあっても，分身側の内面描写は一切しないこと（当然ながら），しかも分身の存在を語り手が否定するような言及もまったくないという，二重拘束下におかれる。そして呼び止められた通行人が，いまいましそうに，失った2秒間を急いでとりもどそうと，さっさと歩きだしたというような，読者にその現実的存在を錯覚させるような仕掛がしてある。

見知らぬ男が誰であるか，突然ゴリャートキン氏には分かった。男は変わ

ったところはなく，普通の人間で，しかもかなり重要な長所をそなえているかも知れないが，絶対に顔を合わせたくない相手だった。「この瞬間の彼の立場は，足元の大地がいまや真二つに裂けようとしている，恐ろしい絶壁の上に立っている人のそれに似ていた。」足元の大地が二つに裂けるというイメージは，ゴリャートキン氏が拠って立つ根拠をまったくもたないことの表現であり，これがもう一つのキイワードである。しかも不思議なことに，彼はその出会いを望んでさえいて，主人公が借りている部屋の近くまで来て男とまた出会う。すると男は，ひらりと身をひるがえして主人公の住居に入り込み，彼のベッドの上に座り込んで微笑を浮かべ，こちらにうなずきかけていた。このくだりで語り手は主人公の分身との出会いへの対応を，順次，第三者的観点から記述していく。

章末に至って，語り手は，ここまで伏せてきた「深夜の友人」の正体を「ほかならぬ，彼自身だったのだ」ともったいぶった口調で告げる。ここで使われる手法は，対位法（のちに作者によって，PRO ET CONTRA 二律背反＝同等の権利をもって主張されるテーゼとアンチテーゼの決闘として取り上げられる）によってアンビヴァレントなこころの中の反対物をゴリャートキン氏という人間の中に見いだし，人間の抱える矛盾を浮き彫りにする。それは分身に対する相矛盾する対応（存在を許すことができないという反発と親友願望との同時発現）となって現れる。

バフチンはゴリャートキン氏を導く三つの主要路線として彼のことばからつぎの特徴を取り出している。「(1) なによりもまず自分が他者の言葉から完全に独立しているようにみせかけようとする――〈おれはこのままで大丈夫だ〉この見せかけの独立心と無頓着は彼をやはり絶えまない繰り返し，言い訳，饒舌へと導く。がここではそれは外へ，相手へではなく，自分自身に向けられている。彼は自分を説得し，元気づけ，落ちつかせ，自分に向かって他者の役を演ずる。鎮静剤的な自問自答は小説の至るところに見られる現象

である。(2) 人から逃れたい，自分に人の目を集めたくない，群衆の中にまぎれこみたい，という願いがある。(3) その言葉に対する譲歩，服従，従順な同化。彼は自分でそう考え，心からそれに同意しているかのようである。……これらの三つの路線がさらにかなり重要な傍系の路線によって複雑化している。」**

ゴリャートキン氏がベレンジェーイェフ邸でなしたこと（過去の行為については詳細は不明だが，おそらく前回にも事件を起こしている）は，一つとして他者から容認されるものがない。彼はその責めから「全然身を消してしまいたい，一切を無に帰し，一握の灰になってしまいたいとさえ願っていた。」茫然自失した彼は夜道の真ん中に立ち止まった，「その瞬間，彼は死につつあった on umiral，消えてなくなりつつあった ischezal。」失態の限りをつくしたいま，言い訳も自己説得もその余地がなく，また相手に譲歩，服従する可能性さえも絶無となってしまった男である。背景にも外界にも，自分の内なる自己にも，かりそめにも自己を支える支点がない男にとって，唯一の対話を続けることのできる相手は，あの予感から引き出すしかなかった。マイナスの札を何枚集めたところでプラスに転じるわけはないが，それでも，人はどこかへ向かわねばならない。こうしてこれまでの自問自答とは違う次元での応対が始まる。自分の分身が出現し，それとの彼一流の自問自答が始まる。

およそ人間の意識の自問自答は閉鎖系ではない。それが外界と連動していることは世論の形成なるものを考えてみるだけで明かだろう。昼夜を問わず念頭を去らない像との論争が人間の生活である。あえて近代と言うまでもなく，およそ意識が生じて以来人間はずっとそのような生物であっただろう。

さて作者ドストエフスキーが操る語り手は，すでにゴリャートキン氏に入り込んで，ゴリャートキン氏の眼で見た状況を報告もし，同氏の進路をすっかり握ってもいるように見える。しかし他方，ゴリャートキン氏と外界との関係の叙述においては，語り手は，いわば中立的な立場をとり，「客観的な

態度」で進行を伝えている（第5章）。一方読者は語り手の語り，地の文の叙述に，全体として公平さと正直さを期待する（すくなくともこの段階では）。しかし，実際には語り手はゴリャートキン氏の内なる眼に成り代わっているだけに，その語りは，時として，ゴリャートキン氏が，私は思った，私は感じたと言明するのと同じ位置と立場からの叙述となる。それだから，読者はどこかの箇所から（あるいは作品の最初からと言った方がいいのかも知れないが），この小説の地の文は，ドストエフスキーの言う「局外の，利害関係をもたない，なんらかの観察者（第三者的な傍観者）」の観点からの叙述なのではない，という了解のもとに読みすすめなければならないはずである。おそらくそのために作者は，こうした観点について断りを入れて，読者に注意したのだろう。しかし語り手の語りの一つ一つがどの視点からのものか，読者がそれぞれをどう判別して読み進めるか，それが実は問題なのだ。

いずれにせよ，分身は，最初は出没のはっきりしないイメージとして現れ，続いてだんだんと近寄り，仕舞いにはまぎれもなく実在する人間像として眼の前にいることになってしまう。こうしてもう一人のゴリャートキン氏が読者にとってもイメージとして定着してから，語り手があらためて「ゴリャートキン氏はいまやこの深夜の友人が何者であるかはっきりとわかった。その深夜の友人こそほかならぬ，彼自身だったのだ。……一言で言えば，あらゆる点で，いわゆる彼の分身 dvojnik*** であった。」（第5章末尾）と確言しても，すでに読者は一種の手品にだまされていて，その後ある程度は主人公同様の観点から分身とつきあうことになる。それゆえ最初に分身が出現する兆しがあったところ，すなわち「誰かがたったいま，彼と並んで，同じように河岸の欄干にもたれていたように，彼には思われたのである」というくだりで，読者もそんな気になったならば，もうそれで勝負は決まって，分身は読者の中でも一人歩きを始める。その後読者がかりにその手法について注意深く考えたとしても，これはそういうパロディであると観念して，それなりの不思議な話しとして，読み進めることになろう。いずれにしても，分

身は読者のイメージの中に架空ながら市民権を得たのであり，それが小説の成立に必要であった。ここから意識の相互干渉ないし相互浸透というテーマを取り出すことができるだろう。すなわち，ドストエフスキーは，意識と意識（ことばとことば）の相互干渉の運動を追ううちに，今で言えば不確定的でファジーな意識構造が人間を規定するもののように感じとり，それを分身という形象にモデル化しようとしたのではないか。

第6章ではゴリャートキン氏が役所の自分の前の席に座っている新参の分身という自己意識と格闘をする。語り手には，読者の興味をつなぎ，それなりの小説空間をつくりだすために主人公と分身を活躍させるという課題がある。もう一人のゴリャートキン氏が役所にいるという状況（主人公の意識）に，読者が，それを仮定（半面の真理）ながら受け入れることに慣らされてきたのは，語り手の腕に他ならない。その成功に役だったのは，ゴリャートキン氏が行なう自問自答の内容が，読者の疑問のあるものに然るべき解答を与えたからだろう。

語り手の叙述は，ゴリャートキン氏の外の現実世界と，ゴリャートキン氏の意識内世界との懸隔を対照的に示す。課内の職員たちは言うまでもなくゴリャートキン氏の幻視から生まれたイメージというものを全然関知していない。それは主人公のまったくの幻想の世界に過ぎないのだが，他方ゴリャートキン氏（地底が裂けるような事件を経験した者）には，周囲の無関心が承知しがたい。語り手はこの二つの世界の対位法を読者に仲介する。そのさい，語り手は一方では外の現実世界に立脚して客観的にゴリャートキン氏を描写しながら，他方ではゴリャートキン氏のこころの内奥に立ち入って，ゴリャートキン氏にとって，彼の分身なるものが何であるか読者に考えさせる。ドストエフスキーが出した解答は，分身とは彼の恐怖，羞恥，悪夢であり，そして彼自身である。だから彼ゴリャートキン氏は分身から逃げるわけにいかない——夜道を敵どもから逃げたようにはいかないのである。

語り手はさらに分身についてつぎのような定義をする。分身は (1) 現に係

長補佐という資格で勤務している当のゴリャートキン氏ではない。(2) 群衆の中に身を隠してそっと立ち去るその人〔キリストを指す〕ではない。(3)「どうか私にかまわないでください，私だって諸君にかまわないじゃありませんか」と明瞭に物語っているような歩き方をする人〔ゴーゴリ『外套』の主人公アカーキー〕でもない。(4) それはもう一人の，まったく別のゴリャートキン氏だった。

ここから小説は後半の，では「まったく別のゴリャートキン氏」とは何か，という課題に読者を誘う。つまり新ゴリャートキン氏とは生物物理学的には旧ゴリャートキン氏そのものであるが，しかしゴリャートキン氏の意識的空間にはまぎれもなくもう一人の，別のゴリャートキン氏がいて，縦横の活躍を続けるのである。

ゴリャートキン氏の状態について語り手は，つぎのように症状をまとめる。(1) やがて彼は自分自身の存在をすら疑うようになった。(2) どんな結果であれ早く疑惑が解決されることを望みながら，ことの本質はまさに意想外のものにちがいなかった。(3) やるせなさが彼を押しつけ，苦しめ，ときおり彼は思考力も記憶力も完全に失った。(4) はっとわれに帰ると，無意識に紙の上にペンを走らせていることに気づいた。

なおも同僚たちが分身の出現に反応しない（認めない）ことが衝撃であるゴリャートキン氏は，善良なアントン•アントーノヴィッチ•セートチキン係長にしつこく質問して，察しのよい係長からこちらに合わせた応答を得ることができた。この問答は速読すると取り違えかねないような，まぎらわしいやりとりになっている。

「……ここに――官吏が一人おるのです，アントン•アントーノヴィッチ……」

「それで！　やはりどうも分からないね」

「アントン•アントーノヴィッチ，新しく入ってきた官吏が一人いるということです」

「さよう，たしかにおります。君と同姓の男だが」

係長はゴリャートキン氏の言うことの意味を悟って，合わせたのだが，主人公は驚きのあまり呆然とし，係長の「君の近い親戚かと思った」という冗談にものも言えなくなる。係長が「ぼくの母方の叔母も……死ぬ前に自分が二人いるような気になったものですよ」と言い，医者にかかるように勧める。読者はそこまで読むと疑問は解ける。しかし一方において分身のイメージが生きたものとして残されることも，作者にとって必要であるから，この会話のまぎらわしさは，それなりの意味があるのだろう。

これより先は，上述のようにつくられた構造の上に，第三者的観察者による叙述が続く。

〔注〕

* F. M. DOSTOEVSKIJ POLNOE SOBRANIE SOCHNENIJ V TRIDTSATI TOMAKH, MOSKVA TOM PERVYJ, DOVOJNIK PETERBURGSKAJA POEMA. 訳文は，ドストエフスキー『二重人格』小沼文彦訳，岩波文庫を参照。

分身という訳語について。ロシア語の dovojnik は古くから使われていて，ドストエフスキーの使ったダーリの辞書にも多くの用例が見られる。訳語は分身のほかに瓜二つ，そっくりさん，二重人格，二重人などがある。そのうち二重人は最近でた訳語であり，内容をよく伝えるような気もするが，日本語としてなじまず，向こうでふつうのことばとして使われていることと合わない。とは言え，分身にしても同じ問題があるが。

** M. BAKHTIN, PROBLEMY POETIKI DOSTOEVSKOGO, MOSKVA, 1963. M. バフチン『ドストエフスキー論』新谷敬三郎訳，冬樹社。

*** Vladimir Dal', Tolkovyj Slovar' Zhivovo Belikorusskogo Jazyka の dvojnik の項にはつぎの定義が見える，「二つの様式または二つの数の個体をもつなんらかの対象」，「二つの顔を持ち，二つの場所の一度に幻として現れる人間」，「水滴のようにたがいに似ているもの」bliznets，ふたご，双子 dvojnja

Akademija Nauk SSSR Institut Rysskogo Jazyka, Slovar' Russkogo Jazyka には「ある他人と完全に類似する人間，または他人の内外面にきわめてよく似ている人間」。